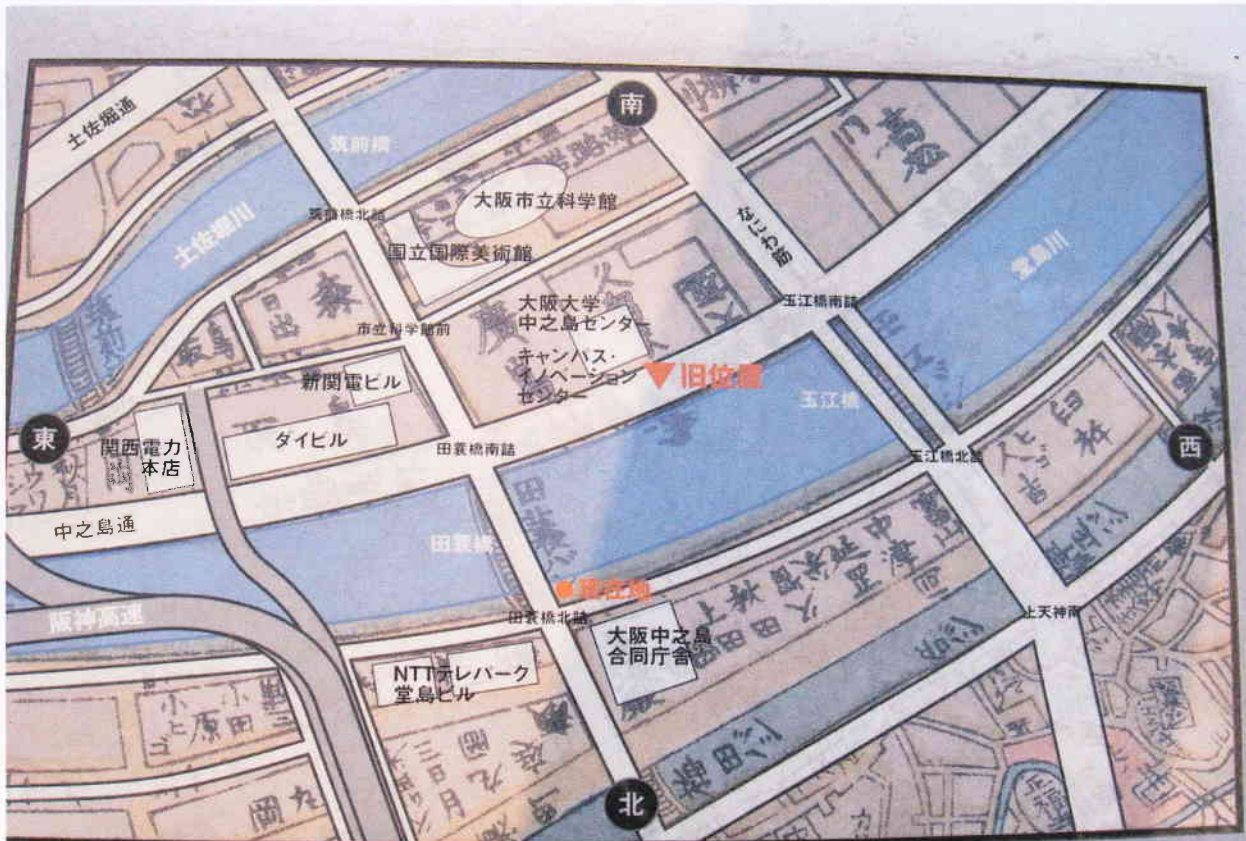
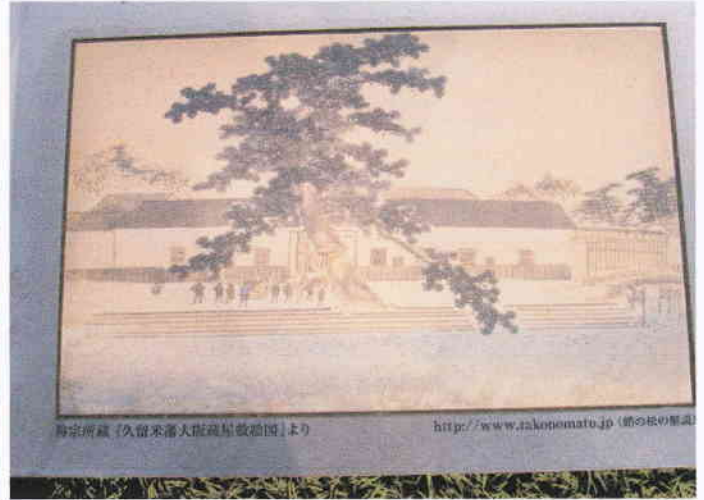


5 久留米藩蔵屋敷ゆかりの地「蛸の松」 大阪市福島区福島1-1

- ▶ 久留米藩蔵屋敷ゆかりの「蛸の松」です。広島藩蔵屋敷と久留米藩蔵屋敷の境に、「蛸の松」と呼ばれる松がありました。当時を偲び再現されることになり、当時あった場所から現在地(下記地図を参照)に移して、復活させたものです。蛸の泳ぐ姿に似ている事から「蛸の松」と呼ばれました。明治に枯死しましたが、切り株は大阪教育大学に保存されています。「蛸の松」は、慶安年間、広島藩主だった福島正則が植え、同藩が代々世話していたという説があります。



大阪市立中央図書館所蔵『改正増補国宝大阪全図』より

- ▶ 双松岡学舎は、天誅組の総裁松本奎堂が、文久元年(1861)昌平黌で同学だった松林廉之助、岡千仞らと創設したものです。松本奎堂は、翌年京都に移り、藤本鐵石、吉村寅太郎らと交わり、文久3年(1863)の天誅組の変で自刃しました。享年33歳。



双松岡跡の碑



松本 奎堂(まつもと けいどう) 天保2年(1832)12月—文久3年(1863)9月25日

三河国刈谷城三の丸に生まれました。三河刈谷藩士、天誅組総裁、尊攘派志士。

諱:孟成、衡。字:士権。通称:謙三郎。雅号:奎堂、孺川、洞仏子。

父(松本印南維成)が刈谷藩用人兼漢学甲州流軍学師範という環境から、11歳で名古屋尾張藩儒臣奥田桐園に入門。伊藤兩村のもとで朱子学を修めました。若くして父を助けて門弟を教授し、18歳のとき槍術稽古で左眼を失明しました。

尾張国愛知郡沓掛新田村の庄屋でもありました。江戸に出て大槻磐溪、羽倉簡堂につき、嘉永5(1852)年、昌平黌に学びます。翌年江戸藩邸に帰って教授兼侍読となりましたが、議論激直のため忌まれて1年間禁固に処せられました。

安政2年(1855)、再び昌平黌に学びました。同6年(1859)名古屋城下石町で開塾。

文久元年(1861)、大坂で昌平黌の同学松林廉之助、岡千仞と双松岡学舎を開塾。

翌年京都に移り藤本鐵石、吉村寅太郎ら尊攘激派の志士と交わりました。

島津久光の率兵東上を利用して討幕を計りましたが急変し、淡路へ逃れます。

同3年(1863)8月、天皇大和行幸の詔が出たのを機に藤本、吉村らと天誅組を組織して総裁となり、侍従中山忠光を奉じて出京します。

大和五条の幕府代官所を襲撃し、租税半減を布告して人心を収めましたが、京都で起こった「8月18日の政変」によって形勢は急変し、行幸は中止となりました。

紀伊、彦根藩兵により追討され、十津川郷に南下し郷士と農兵の参加を募ります。

しかし、諸藩兵の攻撃を受け、戦闘のなかで敵弾を右眼に受けて、盲目となり、

吉野郡鷺家口で自刃しました。享年33歳。

辞世の句:「君が為めみまかりにきと世の人に語りつきてよ峰の松風」

近代製紙業発祥の地 熊本藩蔵屋敷跡

阪市北区中之島5-3-51(大阪国際会議場)

江戸時代、この地は熊本藩(細川家)の蔵屋敷がありました。

熊本藩蔵屋敷跡については、「大阪の史跡を訪ねて 連載12回目」でリーガロイヤルホテル前に建つ「明治天皇聖蹟」の碑と共にご紹介させていただきました。

今回ご紹介する「近代製紙業発祥の地」の碑は、リーガロイヤルホテルの西に隣接するグランキューブ大阪(大阪国際会議場)の庭内にあります。

碑文には次のとおり紹介されています。

「この地は江戸時代熊本藩蔵屋敷であったが、明治になって後藤象二郎が経営する蓬萊社が払い下げを受け、同八年(1875)二月に、イギリス製の機械を用いて洋紙の製造をはじめた。

これが日本の洋紙製造業の発祥という。」



大阪国際会議場内にある碑



後藤象二郎



リーガロイヤルホテル前に建つ碑

「洋紙発祥之地」記念碑 (東京都北区王子)

王子製紙王子工場跡地にも「洋紙発祥之地」という碑があります。

明治6年(1873)、渋沢栄一により王子製紙の前身である「抄紙会社」を設立されました。

日本で最初に洋紙の製造を開始したのは「抄紙会社」ということになります。

今号は新たに発見した大坂の史跡を中心にまとめました。
次号は大坂史跡探訪イベントで紹介した史跡をご紹介します。
どうぞ次回以降もご期待ください。